

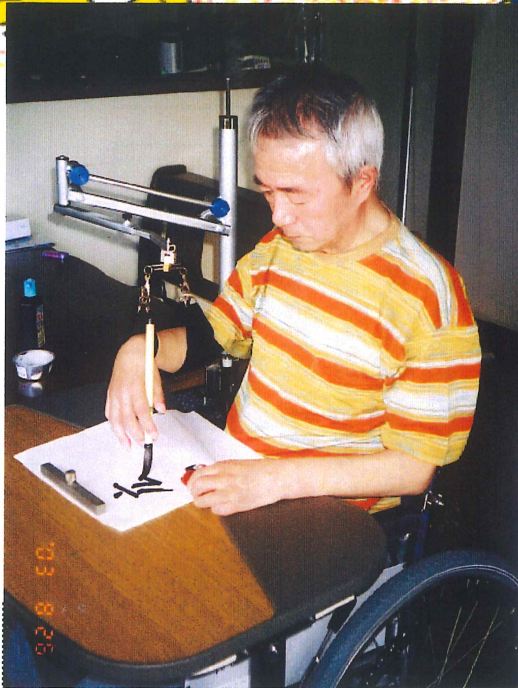
広報

今年はいつの間にか夏も終わり、さわやかな秋は——やってくるのでしょうか？

広報第二号、皆様のご協力で何とか完成しましたのでご意見等をお寄せ下さい。

さて九月十九日には看護協会会長と協議会役員との初の会議もたれます。訪問看護ステーションに従事する看護師への教育の問題や経営、ALSの方への吸引、静脈注射等の問題について幅広く情報交換と協議を行う予定です。内容は各地区部会長を通じてお知らせしたいとおもいます。

会長 宮崎 やす子



題字によせて

長谷川 富士夫(68歳)

障害 (脳幹部梗塞による四肢麻痺)

力の弱い右手をポータブルスプリングバランスで支えながら精神を集中して書きました。まだまだ未完成で満足した出来ばえではありませんが現在の自分の能力ではこれが精一杯です。

三年前、発病後四肢麻痺となり、ポータブルスプリングバランスを使ってなんとかスプーンが持てるように、又、本のページがめくれるようにと訓練をしておりますが字を書くという事は考えもできませんでした。

それが看護師さんの勧めでチャレンジし励まされてまがりなりに毛筆で字が書けるようになり、大変嬉しかったです。

今回は私の未熟な字を題字として掲載していただけの事になり非常に光栄です。有難うございます。



共通サマリー作成と活用

【君津地区】

木更津訪問看護ステーション

板倉 裕子

病院と訪問看護ステーションとが連携をする上で、こちらが必要とする情報が十分に伝わっていないという問題がよく訊かれます。

君津地区では、協議会としてこの問題を保健所に相談し、地域の中で継続看護を考える場を作っていくことになりました。保健所主催で、病院、施設、訪問看護ステーション、保健所保健師を対象に数回会議が行われその結果として、君津地区(木更津保健所管内)共通の看護サマリーを作成しました。

管内の施設、在宅の看護師が、共通理解の元に作成したサマリーを使用するようになり、利用者の状態の把握や継続されるべき看護内容がより明確になったと感じます。

また、各施設の看護師が連携の大切さを再認識し、積極的に看護の継続に取り組めるようになりました。看護連携、看護の継続を目的に作成された看護サマリー用紙が大変有意義に活用されているようです。

—横張先生の講義の感想—

【印刷・山武】
訪問看護ステーション杜の街
石井 照恵

脳梗塞による失語症や麻痺などの障害があり、医学的にこれ以上の回復の見込みがないと宣告された患者であっても、適切な訓練を受けることで著しい改善を示し、書道や絵画などの作品を作るまでに至っている。むしろ障害を受ける前より生きる目標を見出し、いきいきしている。人間の持つ可能性の素晴らしさ、それは人が人を支える心の温かさから引き出されている。「コミュニケーションはべらべら喋ることではない。喋れても、その人の心がなければ本来の言葉ではない。」と述べられていたが、これは失語症の患者だけではなく、それを指導する職員側にも該当する。援助する者の誠意と熱意があつてこそ、その言葉が相手の心に響く。そして、それがその人のやる気を引き出し、人間の神秘的な力を湧き立たせる。横張先生の講義を聴講し、私の心の奥底からやる気がみなぎるのを感じ、仕事において自己の限界を知り悩む自分に勇気をもたらしました。ありがとうございました。



【千葉地区】

みやのぎ訪問看護ステーション
佐野 けさ美

独自のソフトで情報管理

—病院の医師にも好評な報告書ができる—

訪問看護ステーションの運営には人事管理・労務管理・情報管理・経営管理・教育など様々な要素が必要で、これらの要素の集合体をどのように管理するか、管理者一人で担うには重過ぎる内容です。これらの様々な要素が、ある方向性を持って推移していく状態を業務の中に常に取り込んで健全運営をしているか確認し、ニュートラルに戻すことができるシステムの構築が大切だと思います。

訪問看護という専門職ではそれぞれの看護師が患者宅で、適切かつタイムリに看護を提供しなければ選ばれるための人間関係や業務の質を維持することができません。ステーションが求める姿に上手に近づきベクトルに乗っているか否かは管理者が道具を持ち、使いこなすことです。私の訪問看護ステーションではコンピューターを導入することにしました。何処の会社のコンピューターにするか考えました。13社のコンペを行いソフトを決めていきました。一番大変だったのは、営業マンが訪問看護とか看護を殆ど分からない状態で販売していたこと、ソフトの内容がどのようにリリースされているか内容と反映しあっているか把握していないこと(ソフト作成者と営業マンが別でした。)

何回もの説明を開いているうちに訪問看護でコンピューターに何が出来るか、何を要求したいかということも再確認できました。

結局、訪問看護は島津エンタープライズのソフトを利用し、居宅支援事業は互換性のある、京都のシステムプラネットのソフトを利用しています。

日報・月報・報告書・計画書の管理については、合同で知恵を出し合っており、みやのぎ訪問看護ステーション独自のソフトを組み込んでもらいました。日報の内容は、常に選ばれる看護が行えたか評価するとき非常に大切で、訪問看護のすべてがそこにあると考えられます。

ですから、その日のうちに実施内容・問題点・対策・評価・課題を分析記入できるように作り、月報・計画・報告にそのまま使えるようにしました。また、コンピューターをほぼ一台づつ配置し、ランでつないでいつでも何処でも確認、回覧できるようにしました。日報をそのまま使うことは看護師各人の日々の成長と、教育、他の看護師との相談支援ができやすくなります。

また、看護師が月末に残業の多くなる報告書・計画書を日報から自動的にまたは他動的に貼り付けすることにより、残業の減少、労力の無駄を取り除くことができ一定のスペースで働ける環境を提供できます。

報告書を出している医師の中には患者が在宅でどんな様子か目にみえるよううで面白いという評価も頂きました。病院の医師が手に取るように患者を知ることができる様に説明したり報告するのも我々看護師の仕事だとも思います。

現在では、少々値段が安くても業務レベルでは殆ど支障の無いコンピューターも沢山出ています。また、家庭でメールが打てるくらいの知識があれば誰でもできます。管理者はソフトの会社に自分の看護観を伝え、それを作ってもらうだけです。

看護管理の簡素化のために物理的に解決していく事も大切だと考えます。(二)質問、見学に対応いたします)

訪問看護ステーション「杏」紹介

夷隅・長生・市原地区

訪問看護ステーション杏
原 和美

当ステーションは、平成10年10月、併設の介護老人保健施設と同時に開設となり、5年目に入ります。現在は常勤3名非常勤1名、PT、OTは必要時対応している状況です。市原市は人口約28万人、65歳以上の割合が13%で3万6千人と割合から見ると他市と大きい変化は見られないが、当市のステーション数は11ヶ所あり、他の市に比べると多い。その中で独自のサービスを提供し利用者にとだけ満足して頂けるかである。介護保険が導入となって三年、いろいろ情報が飛び交い、利用者の目も厳しくなってきたり、専門職として、知識、技術はもちろん、人間性が評価され幅広い能力が必要になってきます。在宅療養者が増えてきている今、対象者も老人、精神、医療、小児と多種多様であり利用者のニーズに合わせてアセスメント、評価を繰り返し、利用者の家族が共に安心して、在宅療養ができるようにスタッフが日々努力し、明るく前向きに頑張っております。訪問看護も、社会的な認知も大きくなってきておりますが、まだまだ知らない人も多く、いろいろな場所を利用して、多くの人たちに分かち合ってもらえるように伝えていきたいと思っております。

地域医療支援センター

市川市医師会理事

浮谷 勝郎

市川市医師会は9年10月12日に市川市医師会地域医療支援センターを開設しました。医師会が独自に運営する民間のインフォーマルサポートあるいは広義のNPOとして位置づけられています。そして医師会は公益法人の立場から事業を展開しています。

センターは地域の保健・医療・福祉に携わる人々を支援する事目的としており、患者さんへの直接的な対人サービスを主な目的としてはいいない。すなわち、在宅医療に取り組み医師・保健師・訪問看護師ヘルパー・家族・ボランティアなど広く地域で活躍している人的社会資源を孤立させることなく、物心において支えることを目標としています。また、この事業は在宅医療に限るものではありません。現状においては、社会的要請からその大部分が在宅ケアの支援事業となっております。

在宅医療を妨げるもの

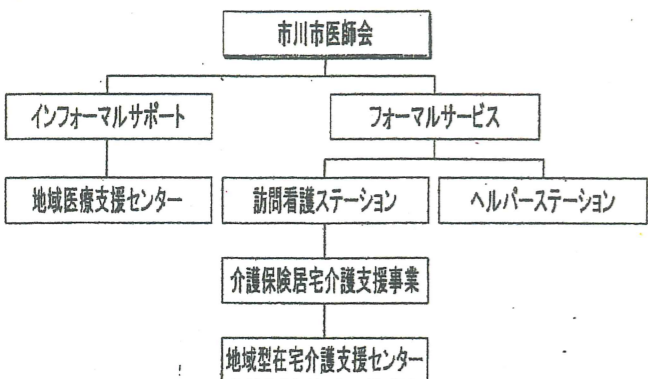
一、医療体制上の問題

- a、緊急な対応を迫られることが少なからずあり、時間的な拘束と精神的な負担が多い。
- b、家族や、介護者との意思疎通に適正を欠き、信頼関係を構築出来ないことがあるが、療養者のことを考えると心労は拒否出来ず、医療者が苦勞する。
- c、必要な検査や治療が出来ない。
- d、後方病院の確保が出来ず、病診連携が困難のまま、孤立した自己完結型の医療に陥り易い。
- e、様々な居宅サービスが介入することにより情報の一元化と共有化および、意思の統一が困難。

二、医療経済上の問題

- a、吸引等高価で衛生管理や保守の困難な物品が多い。
- b、医療材料は購入時に単品での入手は不可能、また各種サイズを用意する必要があるが、消費できずに多量の在庫が生じ不経済
- c、ガーゼ類の消耗が多い。

市川市医師会在宅医療支援事業



市川市地域医療支援センターの事業内容

- 1. 往診医・専門医の紹介
- 2. 喀痰吸引器の貸出・メンテナンス・滅菌
- 3. 医療材料の提供・滅菌
- 4. 医療機器の貸出
- 5. 在宅ケア図書とビデオの貸出・閲覧
- 6. 保健医療福祉関係者への研修施設提供
- 7. 医療廃棄物の適正処理システムの運営

印旛・山武地区活動について

さかえ訪問看護ステーション

森高 静子

6月12日、第一回所長会議を開催。例年の通り無理なく、平成15年度も所長会議3回、研修会2回の計画となった。当地区部会

修会は9月に、各ステーションの記録物を参考に「記録のスピードアップ」についての勉強会の予定です。二回目は1月に講演会の予定です。講演の中から沢山学んで訪問看護の実践に連動して行って欲しいと思う。

員数は15と少なく、いろいろ問題を抱えている管理者も多い。が、最近の所長の顔ぶれが殆ど同じであり、皆がんばっているな...と励まされたり、嬉しく思ったり、益々、所長会議や研修会を有意義なものにして、質の向上を図りながらステーションの発展を願わずにはられない。一回目の研

近況報告では、職場環境、ナースの年齢や健康状態、介護報酬減額による影響、各ステーションの独自性(勉強会、新聞作り、誕生プレゼント、暑中見舞い、年賀状、霊前訪問)等について発表し、お互いの刺激剤となった。

地区活動を訪問看護の質の向上に繋がるよう進めていきたい。

ALS 患者の援助を通して

訪問看護ステーションつばきの里

看護師 松葉 正子

ALS の患者、家族をささえることはとても大変です。特に40歳に満たない方は、介護保険の対象にならないのでサービスが十分に使いません。身障制度もこの4月から支援費制度になり改善されましたが、やはりサービスが十分使えるわけではありません。

必要な機器は高価で購入も大変です。ヘルス財団などの補助もありますがそれでも十分ではありません。ボランティアを募集しても参加してくれる人がなかなかみつかりません。このような状況の中で、私は制度の改正やボランティアの育成などについて、世の中に呼びかけていかなければならないと感じています。

ALS の方を援助していると、介護の大変さを痛切に感じます。私たち訪問ナースにできることにも限界がありますが、地域スタッフと協力し、いつでも相談にのれる手を差し伸べられる存在でいたいと思います。

又、どんな状況になっても生きる気力を失わないように、コミュニケーション方法を確立することは大切です。“生かされてる”のではなく“自分の人生を、自分らしく生きていける”、を目指して援助していきたいと思っています。

印旛・山武地区部会は、5月の総会後の横張琴子先生の講演に感動し、まだ聴いたことのない方々にも先生の今までの活動や実績を聴講することにより学ぶものが多いのではないかと計画しました。他地区からの参加も受けたいと思います。

連絡先：さかえ訪問看護ステーション
TEL・FAX：047-85-0720 森高 静子迄

講演会のお知らせ

日時：12月4日(木) 14:00~16:30
場所：成田福祉館(予定)
講師：横張琴子先生(言語聴覚士)
「言語障害者とのコミュニケーション」

あの板倉さんが『お母さん』...してる!!



昨年7月7日の七夕に生まれました娘の夕奈も 早いもので一歳になりました。出産は病院到着後2時間という初産の(丸)にしては!?!ハイスピードで超安産でした。生まれてからの生活は一変。自分の思うとおり人は動かないということをつくづく思い知らされました。今年の2月からは職場復帰し、母は仕事を娘は保育所生活を楽しんでいきます。当分は仕事と育児に振り回され忙しい生活が続きます。板倉 裕子

広報紙の名まえ募集!
事務局までFAXをお待ちしております